

平成 27 年度 殿屋敷遺跡発掘調査 現地説明会資料 ～堀をめぐるせた八木氏の館～

【はじめに】

殿屋敷遺跡は、平成元年度に圃場整備に伴う発掘調査により初めて堀の一部を確認しました。その後、平成 19～23 年度の 5 年間で遺跡の内容を確認する目的で発掘調査を実施しました。その結果、一辺約 80m の館の中心部を取り囲む堀を確認し、16 世紀代を中心とする八木氏の館であることが判明しました。

殿屋敷遺跡の北西側にみえる山上には、八木氏（のちに別所氏）の城である八木城跡と土城跡があります。殿屋敷遺跡はこれらの城跡とともに国指定史跡となっています。

今回の調査は、平成 27 年度から実施する史跡整備に向けての遺跡の内容確認を目的として実施しました。



養父市教育委員会

2015年11月3日



殿屋敷遺跡周辺の遺跡

殿屋敷遺跡の周辺には、八木城跡をはじめ、八木氏・別所氏にかかわる遺跡が存在します。

八木城跡は本丸に高さ8mを超える石垣をもち、八木氏に代わって城主となった別所氏により、石垣を持つ城へと改修されました。

御里遺跡は別所氏の城主館と考えられる遺跡です。城主の館は16世紀後半に殿屋敷から御里へと移されました。

東から殿屋敷遺跡と八木城を望む

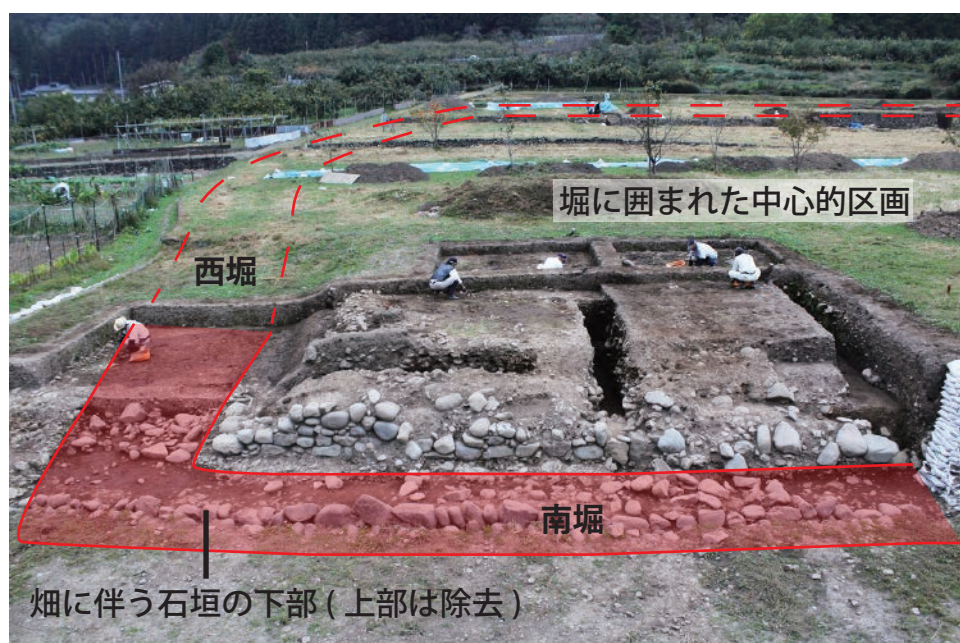


殿屋敷遺跡は八木川北側の、南へ緩やかに傾斜する段丘上に立地します。左の写真手前の方形の区画が遺跡の中心である城主館の範囲です。

今滝寺川を挟み、西側には八木城があり、国道9号線の南側、現在の八木地区の集落は城下町でした。

山陰道を中心街路としてその両側に家々が並ぶ地割りは、城下町の名残と考えています。

堀で囲まれた区画の南西部



殿屋敷遺跡の中心部である、堀に囲まれた区画の南西コーナー部では、南堀に沿って東西方向に築かれた石垣を約10.5mにわたって確認しました。

この部分では、南堀は幅2.5m、西堀は幅2.7～3.7mです。堀の内側は外側と比べて1.5m程度高くなっています。石垣は上部が崩れている部分も多く、堀内には崩れ落ちたとみられる石が確認できます。

※堀は調査では掘削していません。土で埋まった状態です。

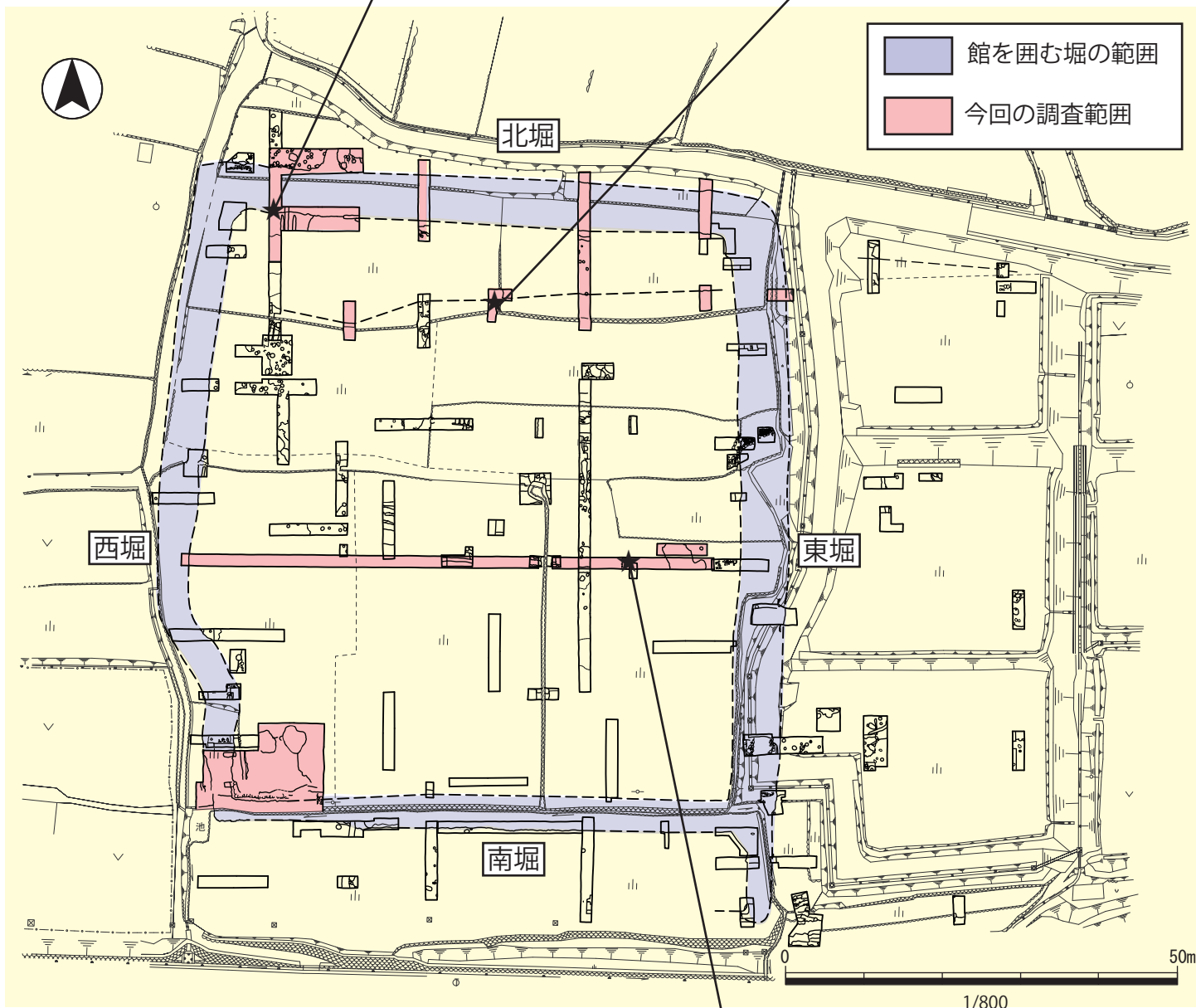
北堀の状況



北堀から出土した木製品



造成土から出土した土師器皿



殿屋敷遺跡の出土土器・陶磁器



南北方向の石組溝



【調査の概要】

今回の調査では、館を囲む堀の南西部と南堀に伴う石垣、北堀、館内部の段構造、石組溝などを確認しました。

堀の南西部と石垣 堀の南西部では、南堀が幅 2.5m、西堀が幅 2.7～3.7m です。石垣は南堀の北側で、堀から 30 cm 程度の間隔を空けて築かれています。

石垣は最大 60 cm 程度の自然石や粗く割った石を横目地が通るように横長に積み上げたもので、勾配はほとんどなく、直線的に立ち上がります。石垣の高さは最大 80 cm 程度です。石材間に小さな石（介石）を詰めて調整していますが、裏込め石はみられません。

石垣を積む部分は硬く締まった地山であり、削って平らに整地しています。

石垣は現在長さ 10.5m を確認していますが、さらに調査区外の東側に延びています。東側は調査を実施していないため、石垣の範囲は不明です。

北堀 北堀は4箇所を確認し、そのうち西側の調査区で堀に埋まっている土を掘削しました。

堀の幅は 5.5～6.1m です。西側の調査区では、深さは 2.5m（堀の北側からの計測値）です。堀は断面の形が逆台形で、底が平らになっており、「箱堀」と呼ばれるものです。堀底からの傾斜は約 47 度であり、急斜面となっています。

堀は、最終的には人の手による埋戻しによって埋没していますが、下部には自然の堆積があります。この自然堆積層は水分を多く含んでおり、自然木や木製品が腐らずに残っていました。焼けて炭化した木片、板状・棒状の木製品のほか、漆を塗った木製品が出土しました。

内部構造 館の中心部は、南へ傾斜する地形に合わせて段差の付く雑壇状になっており、それぞれの段差には畑や水田として利用されたときの石垣が残っています。

現在みられる段差部分の調査では、人工的に土を盛った状況が確認でき、館の敷地を整地する際の造成によるものと考えています。これら造成土からは 16 世紀中ごろ以前の遺物が出土しますが、今回の調査では、備前焼の播鉢のほか 2 枚重ねられた状態で土師器の皿が出土しました。造成の際の地鎮的な意味合いが推測できます。

こうした造成土は、段差部分で実施したすべての調査地点で確認でき、現在の地形は館が機能していた段階の地形を反映していると考えています。

館の建物配置などは、地面が削り取られているため明確な建物遺構が確認できず、未解明です。今回の調査では南北方向の石組溝を検出しました。こうした溝は建物の雨落ち溝や館内部の区画溝となる可能性があります。

【おわりに】

殿屋敷遺跡は平成元年度に確認され、その後の調査の積み重ねにより、八木城主八木氏の館の状況が次第に明らかとなってきました。

今回の調査成果では、南堀に伴って築かれた石垣を確認したことが特筆されます。殿屋敷遺跡の石垣は、豊臣大名である別所氏が築いた八木城の石垣と比べて古い特徴を持っており、八木氏の時代に築かれたものと考えています。堀で囲まれた城主館で、さらに堀に伴う石垣を持つ例は、非常に珍しく、貴重な事例です。また、今回確認された石垣は、石垣の構築技法の面でも、技術の発展段階を示す事例として重要な資料となります。

殿屋敷遺跡は平成 27 年度から史跡整備を開始します。整備に当たっては、可能な限り本物の遺跡を残し、後世に引き継ぐことを第一とし、遺跡は地面の下に保存します。

ふるさと養父市には多くの埋もれた歴史があります。この機会に養父市の歴史を見つめ直し、史跡整備への一層のご協力をお願いします。



殿屋敷遺跡



八木城跡

平成 27 年度
殿屋敷遺跡発掘調査 現地説明会資料

2015(平成 27)年 11 月 3 日

養父市教育委員会 社会教育課

〒667-0198 兵庫県養父市広谷 250-1

TEL : 079-664-1628 FAX : 079-664-1758